動作態と國語の文法的範疇

小林好日

動詞が敍述を成す時は、その動詞の意義內容と共に、敍述の對象たる事物の表象がある。たとへば、吾々は、友を訪ふ、「友を訪ひき」「友を訪ひつ」など、種々の敍述を成すが、友を訪ふといふ事象はいつも同一で、唯語るものゝ敍述の仕方の相違があるばかりである。卽ち話す者の事象に對する態度によつて、敍述の詞が種々の變化を成してゐるのである。もとより敍述に應じて種々の形を與へられる事象は多種多樣で、これを類別するに方つては、種々の方向があり、色彩によつて分ち、大小によつて分ち、輕重によつて分ち得るが、われわれの時の觀念も亦一種の分類の方向である。時の觀念が事象に對する敍述の特徵たる時、之を時化(Tempus)と云ひ、こゝに論ぜむとする動作態は時化を廣義に解すれば、その一種であるが、過去、現在、未來の時化とは別で、之と經緯して現れてゐる特殊の文法的範疇である。

動作態といふ語は、歐米の言語學者の間に用ひられてゐる Aktionsart といふものゝ譯語で

ある。Aspekt とも云ふが、Angrel, Noreen その他のやうに、Aspekt はスラブ語學者のみはゆる Perfektiv と Imperfektiv の區別に限るべきものと主張する學者もある。それ故アスペクトの方は廣狹二義あることになる。Aktionsart は Brugmann の定義によれば、Art und Weise, wie die Handlung eines Verbums vor sich geht とある。すなはち動作の態樣である。はじめ時化の概念のうちに過去現在未來の範疇と混淆されて長く迷宮のうちに在つたが、漸次科學的認識の結果、時化の概念のうちから剖析せられて來たものである。

歐羅巴ではははやくから文法を科學的に研究した時に、すでに過去、現在、未來の三個の理論的に考へられる時化の外に、尙他の語形のあるのは何故かと云ふ問題に逢着してゐる。この問題解決の永い歷史はこゝに述べる遑がないが、動作態と時間的段階との關係を辨別することに特別の貢獻を成したものは、十八世紀末葉より十九世紀初半に亙る獨逸の言語學者で、そのうちに Brugmann, Madvig, Krüger 等を數へることが出來るが、その尤なるものは實に Curtius である。Zeitstufe と Zeitart との名稱を齎したものは、千八百五十二年にあらはれた彼の希臘文典である。其の解說 Erläuterungen zu meiner griechischen Schulgrammatik, Prag. 1868, S. 175–179 に Bei der Zeitstufe kommt es darauf an, welchen zeitlichen Standpunkt der Sprechende der Verbalbandlung gegenüber einnimmt: die drei möglichen Zeitstufen sind also Gegenwart, Vergangenheit, Zuku-

nft. Die Zeitart deutet an, dass es sich bei ihr "um eine innerhalb der Handlung selbst liegende Differenz, nicht bloss um das Verhältnis zu etwas ausser ihr liegendem handelt." Sie kann eine dauernde, vollendende und eintretende sein und wird dann durch Präsens-, Perfekt- und Aoriststamm bezeichnet. Die eintretende oder aoristische Zeitart hat zwei Hauptschatierungen: die ingressive u. effektive と說明してゐる。その希臘文典(二二七頁)にはギリシア語の時化の用法を說いて、繼續態は現在語幹があらはし、始發態は Aorist 語幹があらはし、完了態は Perfekt 語幹があらはすことを說き、ついで未來形は時間的段階では未來をあらはし、その動作態としては繼續態をも始發態をもあらはし、Futurum Exaktum は完了態を現してゐる。現在、Aorist 及び Perfekt は唯直接法に於てのみ時間的段階の意味を持つてゐるのみで、その他の法及び不定法、分詞に於ては全く時間的段階には關係なく、動作態のみを現すものであることを明かにしてゐる。

Zeitstufe, Zeitart の名稱は、千八百五十六年に公にされた Heyse の System der Sprachwissenschaft に於ては、subjektive u. objektive Zeiten といふ名で區別せられてゐる。Zeitart といふ名に含まれてゐる Zeit と Zeitstufe の Zeit との間には多少意味の相違があるから、後に Zeitart の稱は、Brugmann に由て Aktionsart と改められた。動作態の問題は、近世に於ける時化研究上の興味ある問題となり、この事實は印歐語の各國語について研究せられた。

現在過去未來の區別は、動作の話者に對する關係に於てあらはれる。動作が話をする時と同時か、之より以前であるか、之より後であるかと云ふことに在る。現在過去未來は吾々の立脚點との相對的の時間關係である。話をする者の自己を立脚點として客觀的の事象を觀察する時は、過去現在未來の三個の區別以外にはないと云ふことは明かな道理で、これが卽ち時間的段階と稱せられるものである。

時間的段階に對して、動作態は動作の時間的態樣である。話者對動作の關係と云ふものでなくして、動作それ自身に內在する區別である。これ卽ち時間段階と動作態とをクルチウスが內的外的の區別で呼んだ所以である。現在過去未來の相對的區別と離れて、しかも一種の時間的差別である。たとへば、或出來事の繼續といふことは、われわれが之について語り、又は之を語る時と出來事との關係を離れていふことである。He *fell* down 又 he *lay* there nearly an hour に於ける fell と lay 或は to laugh と to burst out laughing との間の動作の繼續の區別は文法上の問題にはならない。これは文法上の形式で區別されず、唯語の意味であらはされるからである。然るに希臘語に於て見ると、

present infinitive γελᾶν (to laugh)

aorist infinitive γελάσαι (to burst out laughing)

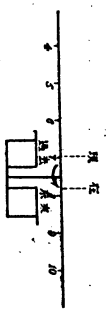
といふ區別をしてゐる。かくの如き動作態は特殊の時化を以てすることあり、特殊の動詞を以てすることあり、又他方にはしばしば唯動詞の意味を變化せしめる前置詞或は副詞を以てすることあり、この最後の立場に近代語は立つもので、之に加ふるに種々なる助動詞があつて分析的の言ひあらはし方を多く用ひてゐる。

ちかごろ Aspekt の問題を Koschmieder は Hönigswald の思考心理學の理論の上に論じてゐる。氏の論は狹義のアスペクトに關するものであるが、國語の動作態の心理を考へる上には他山の石とするに足る。Zeitbezug und Sprache, ein Beitrag zur Aspekt- und Tempusfrage, 1929 同氏はこの問題を研究する上に、これまでの論者は時の進行といふ考を加へることを遺れてゐたことを指摘してゐる。

時の流を空間的にあらはせば、一個の直線を以てすることが出來る。然る時は隨時現出する事象は、某日某時某分某秒に起るものであるから、曆及び時計の上で確定して居り、此の時線上に具體的の位地を定めることが出來る。之を Zeitstellenwert(時位)といふ。この場合、後に來る時位を以て、前に在る時位より順次右に位置するものとする時は上の圖を生ずる。

この直線上に之を指し示してゐる時針は、現在卽ち各瞬間に

於て吾人が存在する曆時的の地位を示してゐるから、Gegenwartspunkt（現在點）と云ふ。この點の上に自我は繼續的に存在し、自我は時線上に於ける現在點と共に、同一速度を以て前進運動を續ける。自我意識と云ふことは、實にこの前進する現在の上に成るからである。自我は時を未來と過去とに分つ。時線上に於ける其の時その時の立脚點から、凡てその左に在るものは過去として、右に在るものは未來として表はし、各瞬間に於て意識は變つて行く。それが切れて居らないことは、各瞬間に於て、今在つた、これから又ある（ebengewesen u. sofortsein-werden）ものとして考へることに由つて生ずる。自我意識と云ふこと、即ち「われ在り」といふことは、今在つた、これから在るであらうと云ふことである。何となれば唯我が在つたと云ふだけならば、我はもはや無い、又我があるだらうと云ふ丈であるならば、我はまだ無い。それ故に自我意識は云はゞ過去から未來への橋渡しであり、過去と未來とが或長さを以て現在で結び付けられるのである。意識の繼續と云ふことは、それ故に過去及び未來を現在に結び付けることによつて生ずる。この場合、その結び付けは、過去から未來への方向にあり、時線上に於て現在が過去の方から未來の方へ動いて行くことを注意しなければならぬ。物理的の立場から云へば現在は無い。何となれば、時計の指針はわれわれ即ち自我或は凡ての自我が時線上いかなる



點に在るかを示してゐるからである。未來と過去とはその點に於て觸接してゐる。しかし心理的の立場から云へば、現在は存在してゐる。この場合、現在は過去から未來へ或距離をもつて介在してゐることを其の本質としてゐる。尙今一つ本質的なることは、現在の擴りのない中心點、卽ち現在點は常に各瞬間に時線上に一の時位を持つて居り、この時位は常に前に向つて進んでゐる。それは自我が時線上に繼續的に過去から未來への方向に絕えず變化してゐるからである。一の時位なくしては、自我は一般に表象することが出來ない。現在は自我の意識に根柢を持つて居り、從つて現在は時位に結び付いてゐるものである。

次に時線上に於ける自我の前進によつて時點が絕えず變化すること、並にその前進の方向を自我の本質として認めることが出來たならば、時線上に固定してゐる時點が、自我に對しては丁度その反對の事情を以てその特徵としてゐることは容易に了解できることである。時

線上に自我及び現在が動くと考へることは、現在及び時曆的系統との相對的移動關係の第一の可能的の考へ方である。之に對しては第二の考へ方が可能であつて、自我及び現在が固定してゐて、その反對に時線が動くと考へることが出來る。昨日の我が今日の我となり、明日の我となると考へることも出來れば、明日の日が今日の日となり、今日の日が昨日の日となると考

へることも出來る。兩者の考へ方はその根柢として空間的の形に時間的關係を考へることから生ずる。時間はもとより自我が創造するものであるから實際に於ていづれが動くかを決定することは出來ないが、この二つは自我の自らに持つてゐる考へ方であつて、時を考へるに於ては必ず記憶しておかなければならない二元的性質のものである。この二つの方向關係からわれわれの言語にあらはれる時化の形式を考へたことは、コシュミーダの創見としてゐるところで、之を Richtungsbezogenheit（方向關係性）と呼んでゐる。

話者は主格について叙述されるものが、主格に對して現在であるものとして叙述することが出來る。この場合には事象は主格に對して既に起つた且尙起るであらうと考へる。事象は主格に對して geschehend に於てある。卽ち起りつゝあるものとして叙述する。然る時は、その叙述の意味內容は過去から未來への方向を持つてゐる。敍述は主格に對して現在であるべきものであるが、しかしその事象は敍述の時、すなはち話者の立場に對して時線上過去或は未來に在る一個の主格に就いても敍述せられ得る故、過去から未來へといふ方向關係を有する敍述の成立は、決して話者の現在に限らるべきものでない。この種の敍述は、事象を話者に對する時位的關係に由て示すものでなく、事實の方向關係にのみ本づいて示してゐる。

之に反して話者は事象をその立つてゐる時位に於て考に上せ、之を geschehen（起りたるもの）

としてあらはすことが出來る。けだし、事象はその時位の上にみとめられるならば、それは必ず事象を全體として觀察されなければならぬ。即ち話者に對する地位關係を離れて「起りたるもの」として置かれなければならぬ。然らざれば時位上にその位地を指定することは不可能になつてくるからである。この場合、時位は話者に對しては未來から過去に向けられてゐる。この方向關係も話者に對する位地關係によつて定まるものでなく、事象は話者に對して過去に在ることもあり、未來に在ることもある。もし話者が全體の過程を geschehen として、即ちその時位に於て全體として把捉し、且同時にそれを現在として表さむとするならば、その全過程は eben→und wird weiter sein (今有つた、尙有るであらう)でなければならぬ。しかしそれは勿論不可能のことである。何とならば、全過程が今在つたとすれば、それは最早在ることが出來ない、それは過去に屬するからである。しかしそれが猶無かつたならば、それは猶未來に在る。全過程はその全體としてそれが過去に屬するまでは、猶未來に在る。一軒の家は造り上げられるまでは、猶造られつゝある。即ち落成はそれが過去であるまでは未來である。それ故に話す者の現在に在る事實は主格に對して geschehend として述べられる時にのみ現在として、言ひ換へれば geschehend として現すことが出來る。

我々が或事象を時に關して述べる時には、自我と事象との間に於ける方向關係としては、如

上の二つの種類を持つてゐるもので、之をコシュミーダは時間的方向關係（Zeitrichtungsbezug）と稱けた。個々の時位及び經過を持つてゐる事象は、時位に於ける我に對してはgeschehenとしておかれる以上、相對的移動關係の第二の表現方向、「未來」↓「過去」を持つて居り、主格の現在の我に對してはgeschehendとしておかれる以上、相對的移動關係の第一の表現方法、即ち「過去」↓「未來」を持つてゐる。事象に對しては、この二つの方向關係が成立つが、敍述の意義內容に於ては、そのいづれが選まれるにせよ、唯一個の方向關係に於てのみ規定せられる。譬へて見れば、數の大小の關係に於て、aが大でbが小であるとすれば、a＞bとしても現し得るし、b＜aとしても現し得るのと似てゐる。そのいづれが選まれるかは複雜なる事情がある、特に各國語の言語構造に依存することが多いと述べてゐる。

從來の言語學にZeitstufeと呼んだものは、コシュミーダも、そのまゝ之を採つて時階關係（Zeitstufenbezug）と呼んだ。即ち話者の位地關係から事象が過去にあるか、現在にあるか、未來にあるかと云ふことを現す。即ちそれの時位が話者に對して過去に在るか、現在にあるか、未來にあるかと云ふことを以て、その敍述の特徵としてゐる。

Perfectumと云はれるものは、コシュミーダは方向關係と時間關係の一種特殊な結合として說明した。即ち話者が「過去」↓「未來」の方向關係を持つてゐる事象を、この狀態に於て過去に於

て完了したもの、卽ち時階的に考へられた動作に由て惹起された狀態として現したものと云はれてゐる。コシュミーダは perfektischer Zeitbezug とよぶ。

以上の論理的範疇をもつて各國語に臨んで見れば、スラヴ語の動詞はその他いかなる動作態をあらはすにせよ、Perfektiv と Imperfektiv との二種の Aspekt があるが、このアスペクトは方向關係をあらはすもので、Perfektiv は「未來」↓「過去」の方向關係をあらはす文法的範疇であり、Imperfektiv は「過去」↓「未來」の方向關係をあらはすものである。ギリシヤ語の現在語幹はスラヴ語の Imperfektiv に比較すべく、Aorist 語幹はスラヴ語の Perfektiv に比較せられる。又英語に於ては、二種の敍述形式があり、一は動詞は規則的變化によるもの、一は to be と present participle とで作らるゝ progressive form があるが、前者は geschehen として事象をあらはし後者は話される點に於て行はれつゝあるもの、卽ち geschehend として敍述を成してゐる。perfektischer Zeitbezug をあらはす最も代表的なものはギリシア語の Perfekt である。總じてギリシア語、スラヴ語、セミチック語は方向關係を文法的範疇として持つてゐるが、その他の國語に於ては論理的範疇としてのみ持つてゐるもので、これらの國語がこれを現すに當つては、唯連語の形式による外はないのであると說明した。

わが國語に於て、動詞もしくは動詞に助動詞を連ねた活用連語の形式を見るに、動作態を現

す形式としてのみ解釋し得る幾多のものがある。

ながらふ　かくさふ　なげかふ

の如きは、之を繼續態として始めてその眞義をみとめることが出來る。これは動詞の連用形に「あふ」の膠着した結果出來たもので後世に於てはこの形式は特殊な語彙に限られ、「かたる」「かたらふ」、「すむ」「すまふ」、「とる」「とらふ」、「うつる」「うつらふ」の如く、同義語もしくは同源異義語として殘り、もとの繼續態の意味を失ひ、又往々「たぶ」「たまふ」「ねぐ」「ねがふ」の如く、もとの形を殆ど忘れられたものもあるが、奈良朝以前に於ては自由に活動した構成で繼續の意味を持つてゐた文法的範疇であつた。

又「あり」を接頭語として、「あり通ふ」「あり待つ」「ありなぐさむ」等の形が上代の文獻に見えてゐるのも、又一つの存在もしくは繼續態を現す形式と見るべきものである。

さよばひに阿理多々斯（アリタ、シ）よばひに阿理加用波（アリカヨヘ）勢（セ）（記）

有雖待（アリアヲド）めしたまはねば（萬一三）

かくしつゝ有名草目而玉（アリナクサメテ）のをの絶えて分れば術なかるべし（萬一一）

之と並んで動詞の連用形に「あり」の膠着した形「散れり」「立てり」等も繼續態もしくは存在態をあらはす形式であるが、古くはその意義も明瞭でなかつた。すなはちこの形は或動作が行は

れてその結果の存在することを云ふものと考へられてゐたやうで、それは取りも直さず、所謂存在態であるが、從來は動作態としてよりは、むしろ時階的の考へ方をしてゐたことは、「一歩假字遣」を初めとして、宣長、義門ら皆ひとしなみに同様であつた。

「一歩」には、或書に、「唐の伯玉といへる人年六十の時……悦び給ふとかや」とあるのを批評して、はるか昔のことを聞つたへて作りし書也。故に伯玉は過去の人よろこび給ふは現在の詞にて過現の相違也給ひしとかやと書べき所なり。問て云、伯玉といへる人といふ。いへるの詞も現在也いかん。答て云、いひし人いへりし人など書てよし。いへると書たるもくるしからず。其時節いへるといふ心もあり、今人のいへるといふ心もある也。いひしといふはむかしの人のいひしと云心也。

と云つてゐる。「云へる」は現在をいふ詞であるから、過去のことには使はれない、「伯玉といへる」は、其時節の現在又は今の現在にいふ意味で用ひても差支ないと云つてゐるのだ。

又「云ひ置給へる古人の詞」といふのを、「古人は過去、給へるは現在の詞にて、過現の相違也是も給ひしと書てよし」といひ、「昔さる人のいへるは」といふのを、「いへるの詞現在なる故、むかしと過去の相違也いへりしはと書てよし」といふ。

唐の伯玉といへる人といふのが正しいのは、論者のいふやうに、「今人のいへるといふ心もあ

る」が爲ではなくして、「云ひ置給へる」「昔さる人のいへる」などの正しいのと同じ理由で正しいものであつて、皆動作の完了をあらはすだけで、吾人の語る時點より見た過現未の區別とは關しないのである。特に之を示さむとする時は、「いへりし」といふ語法を生ずるもので、その時は「し」は話す者の立脚地より見て過去なること、換言すれば、時間段階の意味をあらはしてくるのである。

宣長は「玉霰」に詞に「三つのいひざまのある事」を說いて、花にさく、さける、さきし。ちる、ちれる、ちりし等の例をあげて、

花にさくといふは今さくこと、さけるは咲たると同じことにて咲てあること、咲きしといふは前にさきしことを後にいふ詞なり（中略）其内「さける」といふべきを「さく」といふことはありさく花に云々などのごとし。これらは「さける花にといふ意なり。然れども「さく」といふべきを「さける」さきし」といひてはたがへり。然るを、近世人は此差別をわきまへず歌にも文にも「さく」とやうにいふべきところを「さきし」といふたぐひのたがひ、いづれの詞にもおほし。たとへば他時に花さく春のといはむには、「花さく春」といふべきを、花さける春といはむはひがごとなり。「咲る春」とは花の咲たる時にいふ詞なり。又咲てある花のことを咲し櫻などいふもわろし。そは「さける」とこそいふべけれ、「咲し」とては前にさきしことを後にいふこと

になるなり。又文にたとへば古人の書ける書、いへる說などの事をいふに、今その書その說をとらへて其事につきていはむには、「云々かける」「云々いへる」といふべく、又其書きたりし昔、云ひたりし昔のことをいふは、「云々かきし」「云々いひし」といふべし。たとへば古今集序をとらへて其事をいはんには「此序は延喜の御代に貫之のかけるなりといふべし。然るを近世人はすべてこれらのけぢめなく「古今集の序は貫之のかきし文なりなどやうにいふはたがへり云々

宣長は咲いて其の結果の存在する一面をのみ見たものである。「一歩」のみとめた動作の進行繼續の方面は見なかつた。それ故に、後に述べる廣足の說にいふ如き不足の點がある。殊に甚だしきは、「宣長が「さける」といふべきを「さく」といふはあり、然れども「さく」といふべきを「さける」「さきしなどいふはたがへり」と云へるに對し、後の長野義言は「さけるといひて咲かたに通ずるはあれど、さくといひて咲有かたにはなりがたく」といへる如き正反對に見える說も並び立つに至るのである。義門もまた宣長と同じことを述べて、

いたりしは前(ナク)スデニ至リヲハリシヿヲトウテ、後ニ云ニテ、しハ世ニイハユル過去ノしナリ。いたれるハ至リ有ルノツマレルニテ、今スデニ至リテアルナリ。至るハ正ニ至ルニテ、未ダ至リヲハラザルアヒダナリ(活語雜話初編)

宣長も義門も動作の進行繼續を意味する一面を見なかつたもので、この點に疑を挾んだものは、中島廣足の「玉霰窓の小篠」の說である。

詞のはこびのすぢもていはゞげにもかく（玉霰の說を指す）あるべきこと也。ちかごろ香川景樹の歌に「いはほよりまづぬれそめて山里のかきねしづかにふれる雨かなとあるを、「或人難じて、こは今まのあたり降雨なれば、ふれるといひてはかなはず、ふる雨といふべき所也といへり（廣足云是も玉の說もていへる也）今按に此景樹が歌なるは或人の難もさることなれど、いとしづかに降りいでゝなほやまずふる雨にむかひてはかくいふべきぞおぼゆる。

とて、源氏物語須磨の卷に見える「山かつのかきほにたけるしはしはもことひてなむこふるさと人」とあるは、源氏君のまのあたり柴の烟の立てるをみてよみ給へるさまなるに、いほりにたけるとあるをおもふべきなり」と疑ひ、又

又景樹が歌に「海原の沖のたかくも見ゆるかないくよつもりし水にかあるらん。」こはとこしへにたゝへたる海水なれはつもれるといふへし。つもりしと過去の事にしていふはあたらずと海邊遊翁はいへりき。今按に過去より現在かけたる事を過去のしもていへる例多かり

と論じて、後撰「色ふかくにほひしことは藤なみのたちもかへらで君とまれとか」又貫之集「八重

むくらおひにしやとにから衣たかためにとかうつ聲のする」などの例を引いて、「これらをもておもへば、かの三つの云ひざきにもあながちかゝはるべき事にもあらざるべし」と論ぜざるを得なくなつた。これらを以て思へば、宣長の說は一面の觀察に過ぎなかつたことが明かである。然も後の學者が信ずること篤く、宣長の規則をすべてに適用しようとしたことが、廣足のいふ所でも窺はれる。卽ちかれらは宣長のいつた動作の結果の存在を示す一面のみを見て、動作の進行を示す他の一面を知らず、自ら景樹の歌に見る「降れる」といふ如き正しき例をも誤と斷じ、又動作の完了を示す一面をも知らず、貫之が書けるなりといはゞ、古今集の序をとらへていふ故と考へて、景樹の「いくよつもりしは「つもれると云はなければならないと斷じたのだ。長野義言の玉緒末分櫛の說は、もつともこの語法を論じて肯綮に中るものと云はなければならない。

「花の咲有は昨日咲てけふまで有をもいひ、又今咲てあるをもいへば、さけるといひて咲かたに通ずるはあれど、さくといひて咲有かたにはなりかたく、また「雪の降有は昨日ふりし雪の今日あるかたにもいひ、又今空よりふりて有をもいへり。さればふるといひて今空よりふりてあるかたにはかよへども、ふりて地にあるにはかよひかたし。たとへば「かきわけてつめるわかなにあは雪ぞふる」春しりながらふれる白雪などつみてゐる方につきていへるに

て、つむふると云にかよひ、春霞かすめる方のはるかなるかな「白雪のかゝれる枝に鶯のなく等已に霞て有方白雪のかゝりてあるをみていひ、又「つめるかたみのわかかなりけり「いはひてとれるけふの卯杖ぞ等は、已につみたるをいひ、とりたるをいへるにて、つるといふにかよへり。されど此有の意のりるれはおのおの三くさにわかれば心してわくべきなり。その中に雪雨の今空よりふりてあるをいふは、俗にフリヲルといふ意、花などの今咲てあるをいふは、俗にサキ居ルといふ意にて則ふる事さく事にかよふなり

義言の擧げた事項を列記すれば、

一、動作の進行繼續　「つめる」「ふれる」などつみてゐる方ふりてゐる方につきて云ふもの。「つむ」「ふる」に通ず。

二、結果の存在　「かゝれる」「かすめる」など、「かゝりてある」「かすみてある」を云ふもの。

以上の二種、今日東京語では、フツテル、フツテキルなど云つて區別がない。方言によると、前者にフリヲル後者にフツトルなどいひて區別するところがある。

三、動作の完了　「とれる」「つめる」等、「已につみたる」「とりたる」を云ふ。口語では「トツタ」「ツンダ」にあたる。

以上三種の區別を認めたことは、義言の警眼である。第三項のものゝ「つる」に當ることを教

へたのも卓見と云はなければならぬ。是れ取りも直さず動作態として認めるならば、余の云はむとする(一)繼續態(二)存在態(三)已然態の三種になる。

完了を現す動作態の一種に、已然態といふ名を命じたのは、余の私案で後段に述べる。動詞の連用形に「あり」の膠着したものが、動作態を示すもので時階を示すものでないことを認めれば、從來の惑問は直ちに除かれる。「古今集の序は貫之かけるなり」と云ふのは、宣長は共の序をとらへて云ふが爲で、その昔のことを云ふには、「延喜の世に貫之の此序かきし時」といふと云つた。「古今の序は貫之のかけるなり」と云ふのは、宣長の考ふる如き理由によるのではない。書きたる動作の完了を云ふだけである。それが吾人の語る時を基點として、過去に屬することを云ふのを特に必要としない場合である。換言すれば、古今集の序は貫之がかきたることを云ふだけである。もしその上に貫之の動作が過去なることを云はむとすれば、「此の序は貫之の書けりしものなり」と云ふのである。「書けり」は動作態、「し」は時階を示し、夫々別々の職分を盡してゐる。もし宣長が云ふが如き理論ならば、「書けりしものなり」といふ如きことは云はれないことになる。

宣長は結果の存在をいふことをこの語形唯一の意義とし、動作の完了の意義を見なかつた。そこでその必然の結果として、貫之のかきし文なりと云ふのを誤とした。然し貫之の書きた

ることが過去に在ることを云ふのは、何の不都合もない。それは普通にある例である。吾人の述ぶる如く、已然態を現す場合を認める時は、始めて古今集の序は貫之が書けるものなりといふ文と、貫之がかきしものなりといふ文とは、更に撞着することのないことになる。現に同じ歌が古事記に、「白檮の生に横臼を作り、横臼に加美斯大御酒」とあり、書紀には伽綿蘆とある。

次の例また過去の動作について云つてゐる。

この御酒はわが御酒ならず大和なす大物主の介瀰之瀰枳いくひさいくひさ（紀）

三重の子が捧がせる瑞玉盃に宇岐之あぶら落ちなづさひ（紀）

みつみつし久米の子等が垣下に宇惠之蕁（同）

動作の完了は過去にもあり、現在にも未來にもある。過去現在未來の時間的段階とは別の概念である。續繼態、存在態が過去にも未來にもはた現在にもあるのと同樣である。

更に進んで動詞の連用形に「つ」「ぬ」を添へてあらはす形もまた動作態として考へる時、はじめてその眞意義を捉へることが出來る。「民族」第三卷第六號（昭和三年九月）掲載「態表現の二方面」に於て、小林英夫氏が態を論ずるに方つて、「近代ヨーロッパ語に於ける態の機構を紹介した私の底意は、我が國語に對する一つの見方を與へる――或は私自身にのみ――ことであつた。しかし國語學の現狀を知らぬ私は、既に古語の助動詞つ、ぬ、き等が時をでなく、態を表はしたこ

とが意識的に認證されてをるか否かを知らない」と云はれた。「つ」「ぬ」もこの方面から考へるべきことを認められたことを多とする。余も古く「つ」「ぬ」をこの方面から觀察して、國學院雜誌第二十二卷(大正五年)八號から第二十三卷六號までに、「つ、ぬの本質」と題してくはしく論じた。それ故この項は詳細をかの論文に讓る。

「ぬ」「つ」は共に動作の完了をあらはす。但しその間に又差別があり、前者を余は完了態とよび、後者を已然態と呼ぶ。その差は後者が前者に比べて完了と共に動作の誘起する結果の觀念を有することである。共に完了を現すから、定時の場合、卽ち曆時的に定まつてゐる具體的の事象の場合には、過去現在未來の主觀的區別の上に、動作の完了は、今より以前でなければならぬから、過去の意義を伴つてくる。それ故に、別の立場から敍述すれば、過去の「し」を以ても現すことが出來る。これが「ぬ」が過去と思はれた所以である。宣長は「畢んぬ」と云ひ、守部は過去辭と云ふ。この辭の意義に關する學說の展開は、既記「つ、ぬの本質」に讓るが、概ね過去を現すものと考へた。明治になつて現在完了といふ名を用ひるものが現れたが、これも時間的段階として考へたものである。「ぬ」「つ」を過去と考へる時は、その活用を「な、に、ぬ、ぬる、ぬれ、ね」「て、て、る、つる、つれ、て」とすることと調和が出來なくなる。それ故に富士谷成章は「ぬ」の方はその活用を「ぬ、ぬる、ぬれ」のみとした。明治になつて、草野清民氏、岡澤鉦治氏の如きも同樣である。然し「ぬ、ぬる、ぬ

れ」にも過去と何ら關りのないものがある。從て全く過去辭說を捨てゝ陳述の確めとする山田博士の說も現れた。然し古今集の「君が名もわが名も立てじ浪速なるみつ。ともいふな逢ひきともいはじ」の如き「つ」と「き」と相對して用ひた場合、一方にこの陳述の確めを現す者を用ひ、他方博士の所謂回想の複語尾を用ひたと云ふ理由が分らない。

「つ」「ぬ」を時間段階に關係あるものとして、最も不都合を感ずるのは、不定時に現れてゐる場合である。不定時とは、何日とか何時とか曆時的存在を持たない事象の關係する場合をいふ。

一例を擧げると、

夫れ君の位は、願ひ求むるをもちて得ることはいと難しといふことをば皆知りてあれども、先の人は謀をぢなし。我はよく强く謀りて必ず得てむと念ひてくさ〳〵に願ひ禱れども、猶諸聖天神地祇の御靈のゆるし給はず授け給はぬものにあれば、自らに人も神も申し顯し己が口をもちても云ひつゝ却りて身を滅し災を蒙りて終に罪を己も他も同じく致都（イタシツ）。これによりて天地を恨み、君をも怨奴（ウラミヌ）。猶心を改めて直く淨くあらば、天地もにくみ給はず君も捨て給はずして福を蒙り身も安けむ（中略）然るものを、口にあは淨しと云ひて、心にきたなきをば、天は覆はず地の載せぬものと成奴（ナリヌ）。此を持つ伊は稱を致し捨つる伊は謗を招都（マネキツ）（宣命）

皇位を求むる人の心に就いて述べ給へるもので、不定時の序述である。「つ」や「ぬ」は「タ」と云ふことではない。かゝる例は「つ」「ぬ」を過去としては説明できない。それ故に成章は「ぬ」については、

いぬといふ事をつゝめていへる脚也。いぬとはこゝを去てかしこにゆくといふ詞也。脚にても此心を思ひわたすべし。したしくいはゞ、さはありがたからんとおぼゆる事の終になりたるやうの心なり

と云つて、口語の「テシマフ」「ダンニナル」「ヤウニナル」等をあて、場合によりては「テシマウタ」「様ニ成ツタ」など「タ」を加へても心得よと云つた。然し「つ」と「き」とを比較して「きはとほくて勢ゆるく、つはちかくていきほひつよし」と云ひ、口語「タゾ」を當てた。しかも「つなり」「つべし」「つや」「つめり」に、口語「テキルハイ」「テミラレソナ」「テアルカ」「テキルオモムキヂヤ」等をあてゝ、さきの説明と相容れないことを看過してゐる。

さきに述べたやうに、完了の場合と過去の觀念とは關係があり、動作そのものより見て、完了と云ふことは、或場合には話す者より見て、やがて過去となるものである。こゝに或場合と云つたのは、未來に於ける完了の如き、或は完了を推量する場合の如き、完了と過去とは何ら關係するところがないからである。終止形、連體形、已然形の「ぬ、ぬる、ぬれ」「つ、つる、つれ」等にして特別

の助動詞を伴はないものは、心理的に過去の意味を生ずるものである。

動作態は動作の態様で、動作そのものゝ概念に附くもの、時階に至つては主觀に由つて認識せられる關係的概念である。「ぬ」「つ」の現す過去の意味は決して關係的概念としての時でなく、動作の完了を現すことが、自ら過去の意味を伴ふといふに留る。かの文獻以後の「き、し、しか」の如く主觀をもととして、之より過去なることを示すものとは趣が違ふ。この差がすなはち成章をして、「き」は遠くて勢ゆるく、「つ」はちかくて勢つよしと云はしめた所以である。直說法に於て、完了を述べる時は、觀念上に過去となる道理である。論理的に現在を過去と未來との中間の一段とすれば、完了を認めることは話をなすことより前に在る。從つて動作の完了を云ふ時は、動作は既に過去に在る。更に之を心理的にとり、現在を以て過去及び未來のある長さを含みて成る或延長を有するものと考へても、同樣に完了の瞬間は現在より前、換言すれば過去とならざるを得ない。何となれば、過去或は未來の延長は、その中間に在る現在によつてつながれることに由つて始めて一聯の現在となるに過ぎないからである。「ぬ」「つ」が直說法の時に、過去の意味を生ずるのは、卽ち「つ」「ぬ」の動作態が有する本然の性質で、音義說をとなへる堀秀成が「助辭音義考」に、「ぬ」「つ」が「な」若しくは「て」となる時、音義の上から過去の意味を失ふと云つてゐる如きは、冠履顚倒と評しなければならない。

總じてわが國語に於ても、時化助動詞は、「き」「けり」を除いて皆動作態をあらはすもので、コシュミーダの說を藉れば時間的方向關係(Zeitrichtungsbezug)を現すもののみである。「き」「けり」の如きも、文獻に現れてゐるところは、時間的段階を現すものとなつてゐるが、恐らくその起源に遡るときは、嘗ては同じく動作態を現してゐたものであらう。